

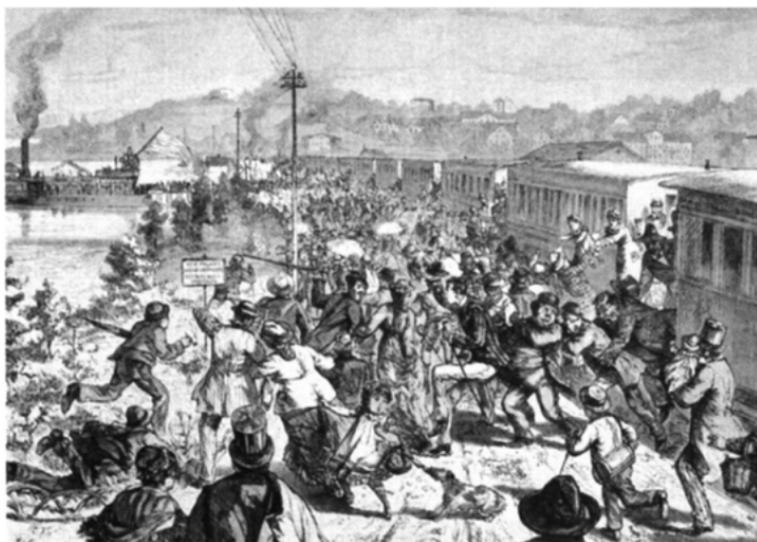


遠景にアルプスを望むシュタルンベルク湖

## 遊覧船

鷗外を惹きつけたシュタルンベルク湖は、ミュンヘン南方およそ二十キロの場所に位置する、長さ約二十キロ、幅三〜五キロの南北に細長い湖である。この湖畔は、古くより王侯貴族の夏季の保養地として知られ、ベルクをはじめとする湖畔の各所にバイエルン王家の離宮が建設された。しかし、それは季節に限られた例外であって、本来この地は長い間、漁を生業とする人々や周辺の農民だけが住む鄙びた辺境に過ぎなかったのである。

しかし、一八五一年、湖上に定期の遊覧船 (Salondampfer) が就航し、それに合わせるかのように、一八五四年にミュンヘンからの鉄道が開通すると、シュタルンベルク湖一帯は、その



『聖霊降臨祭の遠足』(1881年)

趣を一変させる。ミュンヘンから日帰りで行ける絶好の保養地として、たちまち人気の観光スポットとなり、特に夏の数か月は市民が大挙して押しかけるようになった。湖岸はたちまち人で溢れかえり、多くの旅亭や店舗が設けられ、水浴の施設が整えられた。さらに、裕福な市民は、景色のよい湖周辺の一等地を次々に買い取り、そこに軒を並べるようにして邸宅や別荘を建設したのである。<sup>③</sup>

上の図版は、多少の誇張はあろうが、こうした観光の過熱ぶりをよく伝えている。五月から六月における「聖霊降臨祭」の休暇の時期、列車がシュタルンベルク駅に着くやいなや、乗客は煙を吐いている蒸気船へ我先に殺到する様子が描かれている。七月末というハイ・シーズンに、「鉄路ヲ以テスタルンベル

ヒニ赴キ」、そこから「小蒸気船ヲ以テ湖中ヲ一周」した先の近衛公一行も、同じような雑踏の中に身を置いていたに違いない。

しかし、公爵たちは、無事に乗船し、爽やかな船上でビールのジョッキを傾けながら周囲の景観を堪能することができた。特に「遠山突兀トシテ湖面ニ映」る景色、すなわち、遙か南方に望むアルプスの山々が湖面に映るさまは、まさに絶景であった。「愉快極ナシ」という近衛公の印象は、当地へ来ることを提案した鷗外の面目を施すものであつたらう。同時に、実感あふれるこの言葉は、シュタルンベルク湖の魅力を率直に表してもいた。

鷗外が所有していたミュンヘンのガイドブックには、市周辺への小旅行の章が設けられている。シュタルンベルク湖はその筆頭に挙げられている。

一 シュタルンベルク湖 当地への周遊は、ミュンヘンから短時間で行ける最も素晴らしい遠足である。もっとも晴天であることが望ましい。というのも、アルプス連山への眺望が、湖の景色に不可欠となっているからである。湖はアルプスを背にする魅力的な場所に位置し、多彩な樹林で覆われた大丘陵に囲まれている。特にそれらの丘の下部は、別荘や村落で活気を与えられている。

鉄道…毎日八〜十本の列車、六十五分で着く。盛夏には一〜三等車両がある直行列車も何

本か運行され、四十五分で到着する。その他日曜や祝日には臨時列車も走る。二日間有効の往復券は、二マルク二十五ペニヒそして一マルク五十ペニヒ。<sup>(4)</sup>

「ミュンヘンから短時間」という言葉通り、鉄道により六十五分で、夏季に運行された臨時直通列車を利用すればわずか四十五分で、湖の北端に位置するシュタルンベルク駅に到着した。この駅がシュタルンベルク観光の起点である。駅の近くには、バイエリッシャー・ホーフとヴィッテルスバッツハー・ホーフの二つのホテルがあり、鷗外は、一八八六年九月三日付の『独逸日記』で、バイエリッシャー・ホーフに滞在したことを書き記している。しかし、鉄道沿いの「此処は汽車の往来繁く、喧しきことミュンヘンの居より甚し」いため、鷗外は、遊覧船で東岸のレオニへ行き、逗留先を「レオニイ客舎」へ変えている。

実際、シュタルンベルクという町自体にはさほど魅力はない。ここには鉄道とほぼ直結する形で船の棧橋があり、列車のダイヤに合わせて遊覧船が出港した。それゆえ先の図版においても分かるように、多くの人々は、列車を降りるとそのまま船に直行し、東岸のレオニや西岸のベルンリート、あるいは南端のゼースハウプトなど他の景勝地へ赴いたのである。

鷗外がシュタルンベルクへ行くきっかけとなったのは、この地で起こった歴史的な事件、つまり、湖畔におけるバイエルン国王ルートヴィヒ二世の謎の入水であった。「先王」ルートヴィヒ一世

が、政治以上に芸術を愛したメセナ王であつたことは前に述べた。王の孫にあたるルートヴィヒ二世は、それに輪をかけた芸術狂であつた。彼は、騎士道精神が生きていた中世ドイツの理想を追い、そのためにワーグナー等の芸術家を招聘し、またノイシュヴァーンシュタイン城をはじめとする豪華な城を次々と建造した。そのうち王は公の行事に関心を示さなくなり、人を嫌つて昼夜逆転の生活を送るようになる。こうした状況を見かねた大臣や高官たちは、ルートヴィヒ二世が心を病んだとして王位から追放し、シュタルンベルク湖畔のベルク城に軟禁した。その直後、一八八六年六月十三日、散歩に出たルートヴィヒ二世は、侍医のグッデンとともに、付近の湖岸で溺死体となつて発見されたのである。

この夜、鷗外は、そのような大事件が起こつているとはつゆ知らず、ミュンヘン市内の酒場で、加藤や岩佐たちいつものメンバーと大いに盛り上がつていた。翌日、起きて外を見ると、首府は国王崩御の知らせに上を下への大騒ぎになつていたのである。自分たちが歓楽に打ち興じた同じ夜に、偉大な芸術王が謎の死を遂げ、侍医も君主を追つて命を落とした。鷗外は、こうした巡り合わせに深く感じ入つたに違いない。

その混乱も一段落つた六月二十七日、鷗外は例の二人の友人と、初めてシュタルンベルク湖を訪れた。国王、そして同じ医家として職に殉じたグッデンの遺跡を訪れ、弔意を表すためであつた。この時、彼らは遊覧船を利用したことが『独逸日記』に記されている。その遊覧船から

ベルク城の湖岸を見やり、亡き国王と侍医に思いを馳せたのだろう。当時、遺体が発見された現場には、木の墓標が立てられてその所を指し示していた。

それからおよそ一か月後、先の近衛公爵とシュタルンバルク湖に遊んだ際、鷗外たちは同様にこの遺跡へと公爵を案内している。近衛の旅日記を再び引用してみよう。

船去ルコト少時向岸小宮殿ヲ見ル バエルン国王ノ離宮ニシテ二月前故ルードウ<sup>キ</sup>ヒ王  
二世ノ病<sup>びょう</sup>痾<sup>あ</sup>ヲ養ハレシ所ナリ 又水面ニ一ノ木標アリ 是同王ノ自ラ身ヲ水中ニ投シ其  
遺骸ヲ取上ケシ所ナリト 石標ヲ建ントスル者アリ 未タ之ニ着手セス假<sup>か</sup>ニ木標ヲタツ

現代語訳

船が出発してしばらくすると、向こう岸に小さな宮殿が見えた。バイエルン国王の離宮であり、二か月前に故ルードヴィヒ二世が療養していたところである。水面に一つの木の標があった。これはその国王が身投げをして遺体が引き上げられた場所だそうだ。石の標を建立しようとしているのだが、今だ着手せずについて、仮に木の標が建てられているのである。

近衛が、船上で鷗外たちの案内を受けながら、ルードヴィヒ二世の終焉の場所を眺めている。先にはビールで愉快に乾杯した公爵であったが、このひとときは国王の悲劇を思い、肅然とした